

ペナン島における教育の自然的・社会的特性と日本人学校の役割

前ペナン日本人学校 教諭

北海道苫小牧市豊川小学校 教諭 秋山慶太

キーワード 自然的・社会的特性、多民族国家、英語教育、国際交流、日本人学校の役割

赴任地の概要 (2025年3月31日現在)

ペナン日本人学校

Penang Japanese School

URL : <https://sites.google.com/mypjs.com/home>

1 はじめに

2022年4月から3年間、縁あってペナン日本人学校に派遣された。ペナンでの3年間は、私にとってかけがえのない貴重な経験となった。学校での経験はもちろんのこと、3年間過ごした経験の一つひとつが私の視野を広げるものであった。

マレーシアのペナン島は、インド洋に浮かぶ美しい島であり、歴史的にも文化的にも多様性に富んだ地域である。この島は、1786年にイギリスの東インド会社が東南アジア進出の拠点として選んだことから、東西貿易の中継地として発展し、現在ではユネスコ世界遺産にも登録されており、マレー系・中華系・インド系の文化が融合しているジョージタウンを擁する国際都市となっている。

ペナン島の教育環境は、マレーシアという多民族国家の特性を色濃く反映しており、マレー系・中華系・インド系を中心とした多様な文化が共存している。このような背景の中で、日本人学校は、異文化理解と国際交流の拠点として重要な役割を果たしていると考える。



多文化が融合する都市「ジョージタウン」

2 ペナン島の自然的・社会的特性

(1) 自然的特性と教育環境

ペナン島は南北約24km、東西約15kmの広さを持ち、人口は約70万人。熱帯気候に属し、年間を通じて温暖で湿潤な気候が続く。自然環境は豊かで、海や山に囲まれた地形は、子どもたちの体験学習や環境教育にも適している。

教育面では、自然とのふれあいを重視した活動が盛んであり、ペナン日本人学校でも、地域の自然を活用した学習が設けられている。例えば、地元の公園や植物園を訪れ、環境保護や生態系について学ぶ機会が提供されている。日本では見られない動植物に触れる機会が多く、自然的特性を生かした活動を行っている。各学年で校外学習の機会が多く設けられており、自然的・社会的特性を考慮した校外学習を計画・実行している。

(2) 社会的特性：多民族国家

マレーシアは多民族国家であり、ペナン島は特に中華系住民の割合が高い地域である。公用語はマレー語だが、教育現場では中国語、タミル語、英語などが併用されており、言語的多様性が教育の大きな特徴となっている。普段学校で過ごしているだけでも、マレー系・中華系・インド系の職員の方々と触れ合う機会があるため、日本人学校にいる間でさえ多民族国家を感じることができる。

このような多言語環境の中で、日本人学校は日本語教育を中心に据えつつも、英語教育にも力を入れている。英語はマレーシアの教育制度において重要な位置を占めており、ペナン日本人学校でも、英語によるコミュニケーション能力の育成が重視されている。実用英語技能検定も行っており、多くの児童生徒が受験している。また、現地校やインターナショナルスクールとの交流を通じて、子どもたちは多文化・多言語の環境に自然と適応し、国際的な視野を広げていく。これは、将来的にグローバル社会で活躍するための基盤となる。

また、マレーシアの公用語はマレー語のため、マレー語を学習する機会も設けられている。ペナン日本人学校の児童生徒は、多文化・多言語の感覚を肌で感じることができると貴重な体験をしている。



現地校の授業の様子

3 日本人学校の役割

(1) ペナン日本人学校の役割と国際交流

ペナン日本人学校は1974年に設立され、2024年度には開校50周年を迎える。日本の教育課程に基づく授業を提供し、海外に住む日本人児童生徒が帰国後もスムーズに日本の学校に適応できるようにしている。ペナン日本人学校では、国際交流を重視した教育活動が展開されており、現地校や現地大学との交流が積極的に行われている。地域とのつながりを深めることで、教育の場を広げている。互いの文化を交流し合うことで、異文化理解と共生の力を育てていくことができている。



ペナン日本人学校校舎（2025年9月に移転が決まっている。2025年7月までの校舎）

(2) 日本の教育課程か、英語教育か

しかし、近年では児童生徒数の減少が課題になっており、日本人学校の役割が問われているように感じた。日本企業の撤退や日本人社員の縮小のため、日本人の母数が減少していることが大きな要因である。だがそれよりも大きな要因が、インターナショナルスクールの存在である。日本人学校よりも、インターナショナルスクールを選択する家庭が増えている。日本の教育課程よりも、英語教育を重視する家庭が増えていることが現実であった。ペナン島のインターナショナルスクールは、他国や他地域よりも入学しやすいため（学費や試験等）、日本人学校よりもインターナショナルスクールを選択する家庭が増えていた。どちらが正しいというわけではなく、それぞれ子どもの将来を見据えてどう選択するかの問題であるため、もどかしさはありつつも、受け入れなければならない現実であった。

4 ペナン島における英語教育

(1) ペナン島の学校英語教育

ペナン島では、多くの学校で小学校1年生から英語教育が開始され、幼稚園でも英語を教える園や家庭が増加中である。実際現地校を視察した際には、英語力の高さに驚かされた。英語は、第二言語として広く使用されており、ビジネスや教育の場でも重要な役割を果たしている。現在では、英語が使用できないと良い就職先がないとも言われているほど、英語を重視しているようである。

(2) 英語教育とアイデンティティの維持

ペナン島では、英語が日常的に使用される言語であり、インターナショナルスクールでは英語が主な授業言語となっている。そのため、日本人家庭では、子どもたちの日本語能力の維持が課題となることもある。そのため補習校があり、多くの日本人の子どもたちが通っている。

ペナン日本人学校では、日本語教育を基盤としながらも、英語教育をバランスよく取り入れることで、言語的アイデンティティの維持と国際的なコミュニケーション能力の育成を両立させている。そういう部分をお一層アピールすることが、今後の日本人学校の運営において重要になってくるのだろうと考える。また、日本人学校の保護者においては、家庭でも母語である日本語を大切にしようとする考え方をもち、言語の多様性の中で、自国の文化を大切にする姿勢が育まれていると感じた。

5 おわりに

ペナン島の教育環境は、自然的な豊かさと社会的な多様性が融合した、非常にユニークなものである。その中で日本人学校は、日本の教育文化を守りつつ、現地社会との交流を通じて、子どもたちに国際的な視野と多文化理解を育む場となっている。多民族・多言語社会における教育は、単なる知識の習得にとどまらず、異なる価値観を尊重し、共に生きる力を育むものである。

ペナン日本人学校での教育活動は、まさにその実践の場であり、児童生徒が日々の学びを通じて「自分とは異なる他者」との関わり方を自然に身につけていく姿に、教育の本質を感じることができた。異文化に触れることで、自分自身の文化や言語を見つめ直す機会にもなり、アイデンティティの確立にもつながっていると感じる。

また、教員としても、異なる教育文化や価値観に触れることで、自らの指導観や教育観を問い直す貴重な機会となった。現地の教育関係者との交流や、インターナショナルスクールとの比較を通じて、日本の教育の強みと課題を客観的に捉えることができたことは、今後の教育実践に大きな示唆を与えてくれるものである。

最後に、ペナン日本人学校の教育に携わった者として、今後もこの学校が、異文化理解と国際交流の架け橋として、地域に根ざした教育を展開し続けていくことを心から願っている。そして、ここで育った子どもたちが、将来それぞれの場所で、多様性を尊重しながら活躍していくことを信じている。ペナンでの3年間は、私にとって教育者としての原点を見つめ直す時間であり、かけがえのない宝物となった。